

アイヌ民族の歴史 アイヌの詩人 森竹竹市を中心に

8月26日(金) 14:40~16:10 福岡会場

講師 山本 融定 森竹竹市研究会

皆さん、こんにちは。北海道の苫小牧から来ました山本です。

お渡しした4枚綴ったレジュメに従って、最初に明治以降のアイヌ民族の歴史について、次にアイヌの詩人、森竹竹市を中心にスライドを見ながらお話をしていきたいと思えます。森竹竹市さんは、白老に1902(明治35)年から1976(昭和51)年まで大変苦難の時代を生き、民族の復権に生涯を捧げられた方です。

【スライド1】明治政府のアイヌ政策

北海道は蝦夷地といわれていましたが、1869年(明治2年)明治新政府は開拓使を設置して蝦夷地を「北海道」と改称し、その領土を日本国家の領域に編入し11カ国86郡として開拓に着手しました。

先住民族であるアイヌ民族には、さまざまな同化政策をとり、日本人化・皇民化をはかり、民族の独自性をスポイルする政策を行いました。

【スライド2】黒田清隆

黒田清隆がやって来る前に、実はもう一人、この北海道の開拓に尽くした島義勇という役人がいました。札幌を開拓使の本府に決め、現在の北海道庁の基礎をつくりました。島義勇は佐賀の出身で札幌を北海道の中心にして、現在の札幌市の原形をつくり、壮大な都市構想を立てたのです。札幌市役所の中に彼の銅像がありますし、北海道神宮に碑だとかそういうものがあります。

その後、薩摩出身の黒田清隆は開拓使次官から長官になり、屯田兵制度や樺太千島交換条約を締結して日露の国境を定めました。また北海道というのは米が穫れないんですね。今は穫れますが当時は穫れず、北海道の産業を何にしていけるのか考えたわけです。

【スライド3】ケブロン

明治政府はお雇い外国人をよんで近代化を図りましたが、開拓使の黒田清隆は米国に行ってケブロンという人を招きます。ケブロンは当時米国の農務局長、日本流で言うと大臣級だった人ですが、北海道開拓に西洋技術の導入、西洋式農法の導入などに尽力しました。それから、黒田が牛と羊を北海道に入れようとしたのですが、北海道に行かれた方は、ジンギスカン鍋で羊肉を食べられた方もおられると思います。その牛や羊を米国から買い、それらを連れてきたのがエドウィン・ダンという人です。北海道は米が穫れず、牧畜を重視したのがこのエドウィン・ダンで「北海道畜産の父」と云われています。

【スライド4】新冠御料牧場

これは、新冠(にいかつぶ)と読みます。1888(明治21)年、開拓使は新冠牧馬場を作りましたが、これは後に新冠御料牧場(現農水省家畜改良センタ 新冠牧場)となりましたが、これは御料ですから天皇陛下の牧場ということで。大正天皇や昭和天皇も皇太子のときにこの新冠御料牧場に来ておられます。それから、三笠宮や常陸宮などの宮様方も札幌に行かないでこの新冠に来たんです。それぐらいこの牧場というのは有名な牧場だったわけです。

実はやはり開拓に必要なのは馬だということで、物を運ぶ輸送ですとか、それから農耕馬、すなわち開拓農業には農耕馬が必要だということに黒田が着眼した。そして、ケブロン、エドウィン・ダン、こういう人たちが新冠御料牧場、国の力をもって大牧場をつくるということになります。

【スライド5】エゾオオカミ

これはエゾオオカミの頭蓋骨であり、次のは北大の博物館の中にあるオオカミの剥製です。もう北海道にはエゾオオカミはいないんです。エゾオオカミも、このシカや馬と関係があるんですけども、このオオカミが二千数百頭ぐらいいたのではないかと推測ですけども考えられるわけです。そして、この後にお話ししますが、この頃シカがどんどん減少してきます。シカがいなくなると、シカを食べていたオオカミが、次に何を標的にしたのかというと、先ほどの新冠御料牧場の馬なんですね。馬が食われては大変であり、ケブロンはエゾオオカミを毒殺することを提案し、エゾオオカミは北海道からいなくなりました。

なぜ、エゾオオカミが馬を襲ったのかというと、エゾシカは、明治初期の大雪と乱獲で、一時は絶滅寸前まで減少しました。

【スライド6】官立美々鹿肉缶詰工場

また開拓使が、官営の缶詰工場をつくって何十万頭とシカをとったわけです。そして、そのシカの肉は東京や横浜にほとんど送る。一部は札幌や函館にある開拓使の役人や外国人らに消費してもらおうとしたわけです。大雪と缶詰工場などによってシカも絶滅寸前に追い込まれてしまう。ですから、オオカミもそこに生きていくことはできなくなり、馬を襲うという因果関係になったのです。

【スライド7】釧路アイヌの窮乏生活

シカの減少はエゾオオカミの問題だけではなく、シカを食料としていた北海道の先住民族であるアイヌの人々にも大きな問題となりました。釧路はアイヌ語ではクスリと言います。今は20万都市になっておりますけれども、この釧

路は漁業でも今日は大変有名ですし、炭鉱もつい近年までありました。阿寒に行かれた方は釧路を御存じだと思いますけれども、道東にあります。明治の初めにこの釧路にアイヌの人々がどれぐらいおられたのかというと、大体 200 戸以上住んでいました。和人、日本人はどれぐらいかという、役人だとかそういう人が 10 戸ぐらいあった。200 対 10 です、圧倒的にアイヌの方々が多かったわけです。

ちょっとこれを読んでみます。「食料はさきに山野に放棄せし鹿の筋肉を、雪中より掘り碎いて汁とし、櫛(なら)の実の上皮を碎いて中身を煮て朝夕一椀を食するのみ。ある者は、それすら全く絶えて絶食数日に及ぶ」これは釧路の役所が根室県に報告した公文書なんです。

これは大雪や缶詰工場を作りアイヌの人々が食料にしていた鹿が減少し、山の中から鹿の筋骨、これを雪の中から掘り出して、碎いて、そしてドングリの実と一緒に煮て食べなければならない。それすらなく、絶食数日に及ぶ者も出てきている、そういう状態だと県に報告しているわけです。

そこで役所では、釧路アイヌをこのまま釧路に置いてはよろしくないということで「おいおい釧路を引き払わせ、一方に寄せ集め授産の功をあいたていたく候」ということになり 30 km も離れた現在の鶴居村に強制移住させたのです。この鶴居村は、丹頂鶴のいる観光地になっていますが当時無人に等しかったところに釧路からアイヌを追い払い、釧路に鳥取県から屯田兵などを入植させたわけです。こういう強制移住の悲劇は、北海道内各地で起こりました。

【スライド 8】屯田兵の入植と金子堅太郎

この福岡の方々も北海道で屯田兵になられた方もおられますけれども、屯田兵というのは、黒い点で示したこの 37 カ所に置かれました。主に釧路や根室、札幌周辺などに置かれますが、釧路や根室は対ロシアの関係、札幌は人口が少なく屯田兵を置きます。また旭川や士別などの内陸にも設置します。

この福岡出身の金子堅太郎は「彼等囚人八因ヨリ暴戾ノ悪徒トナレバ、其勞役ニ堪エズ斃死スルモ、今日ノ如ク重罪犯人多クシテ徒ラニ国庫支出ノ監獄費ヲ増加スルノ際ナレバ、囚徒ヲシテ是等必要ノ工事ニ服役セシメ、若シ之ニ堪エズ斃レ死シテ其ノ人員ヲ減少スルハ、監獄費支出ノ困難ヲ告ケル今日ニ於テ、万已ムヲ得サル政略ナリ」といい、本州の政治犯や犯罪人ら囚人を北海道開拓のために使おうと考えたわけです。金子堅太郎といえば、伊藤博文のもとにあって、日本の旧憲法をつくって、後に農相、それから法相も務められた方ですね。このときはそう思われたのです。これら囚人により開かれた道路が北海道の基幹道路となります。1 カ所に大体 1,500 人から 2,000 人ぐらいの囚人小屋をつくっています。道路の他に炭鉱や硫黄山、農業開拓など北海道開拓には多くの囚人の力と血が注がれました。月形に監獄所の跡が記念館となって残っておりますので、ぜひ見てください。

【スライド 9】北海道の人口推移と開拓地の拡大

これは、北海道の全人口の中に占めるアイヌ人口の比率パーセンテージなんです。1873(明治 6)年からのもので、北海道には 11 万人しか人がいなかったんです。そのうちの 1 万 6 千人がアイヌの人たち、14.63%ということになっております。アイヌの人口は、それほど増えていません。逆に昭和になっていくと減っていきます。政府はアイヌに同化政策をとり、アイヌを保護する政策だといいましたが、不思議に減ってきます。

ところが、こちらをちょっと見てください。和人は 1873(明治 6)年に 9 万 5 千人しかいなかった人口が、1902(明治 35)年に 100 万人を超え、その後 1918(大正 7)年に 200 万人、そして 1936(昭和 11)年 300 万人を超えます。ちょうど私は昭和 12 年生まれですから、私が生まれたころは 300 万道民ということだったんでしょうね。今は倍までいきませんが、570 万道民といっております。

北海道に怒濤のごとく屯田兵や開拓民などが海を渡って来ました。これは、北見の斜里にあった三井農場の開拓地です。今、ちょうど知床が世界自然遺産の中に入りましたけれども、その知床の近くです。開拓によって木が全部切り倒されました。シカや熊や、あるいはそれとともに生きてきたアイヌの人たちが生きるすべは、ここにあるでしょうか。

【スライド 10】同化政策・北海道旧土人保護法

明治政府による北海道開拓はこのように急激に進みましたが、一方これはアイヌの人々に多くの苦しみを与える同化政策の実施でした。一口で言うとアイヌ民族を日本国籍に編入し、法的に日本国民化する。鮭漁や鹿猟を制限し、農耕を奨励し、アイヌ語を禁止して日本語を使用するように教育するということでした。1899(明治 32)年、旧土人保護法を制定しアイヌの保護をはかった。同法第 1 条、「北海道旧土人ニシテ農業ニ従事スル者又ハ従事セムト欲スル者ニハ一戸ニ付土地一万五千坪以内ヲ限り無償下付スルコトヲ得、第 9 条北海道旧土人ノ部落ヲ為シタル場所ニ八国庫ノ費用ヲ以テ小学校ヲ設クルコトヲ得」として一戸五町歩以内の土地を給与しアイヌの農民化をはかり、一定の児童のいるコタンに国費でアイヌ学校・土人学校を特設し、和人との分離教育を行うというものでした。

【スライド 11】年譜・庁立白老第二尋常小学校

これは森竹竹市の年譜です。森竹さんは 1902(明治 35)年、白老村でアイヌの家の長男として生まれましたが、この年に白老に土人学校と言われたアイヌ学校ができました。正式な校名は(北海道)庁立白老第二尋常小学校といい、和人の児童らが通った学校は村立白老第一小学校といいました。このアイヌの児童が通った土人学校は 25 校新設し、アイヌ語をすて日本語を強制的に学ばせ、忠君愛國を教育の柱としアイヌの日本人化・皇民化をはかりました。またコタンには、この学校ともう一つ病院をつくりました。これも道庁立の土人病院をつくったわけです。森竹さんは、日露戦争が始まる 2 年前にここに生まれましたが、彼のお

母さんは盲目でした。お父さんは先に亡くなりました。おばあちゃんも目が悪い。この両親、おばあちゃんというのは、皆アイヌ語を使って生きてきた。だから、家での日常語というのは当然アイヌ語ですね。

彼は、1915（大正4）年に小学校を卒業し漁場などで働き、その後郵便局の配達員の職をえます。そして、やがて15歳で国鉄の駅夫に採用されています。彼は、郵便局長さんや駅長さんに非常にかわいがられ、地元のお寺で開かれていた句会にも参加して「筑堂」という俳号を与えられました。

国鉄に入った森竹さんは苦勞をして雇員採用試験に合格し、雇人になります。これは昭和初めの不況の時代で就職難であり、十数倍の倍率であったそうです。大体、北海道の国鉄の職員が当時、2万2千人ぐらいたんです。そのうちの大体1割、10%というのがこれが奏任官といって、東大や何かを出たような偉い方がちょっと札幌に来て、国鉄の札幌に勤めるというように、そういう大学出が10%くらいおり、あとの30%くらいが彼がなった雇人のような人ですね。後の60%近い人たちは、駅夫などの傭人ですね。

彼は小学校しか出ていないのでこの受験には、特に歴史、数学が出来ず苦勞しました。この間、この森竹は浜で働いて酒も覚えたというんです。もう15歳っていったら当時は大人ですね。今の子供のなかには、殺人事件を起こしたり、警察を襲ってみたりいろいろやっていますけれども、森竹少年は家のために一生懸命働いたわけです。そして、やっと郵便局から国鉄の職員、そしてさらにその上の職員をめざしたわけです。

そして、彼は同人誌「銀鈴」というのを自らつくり発行します。そして、彼は結婚もします。やがて札幌鉄道局の鉄道教習所の車掌科というところを受けます。これは10倍ぐらいの難関で、恐らく、アイヌの人で車掌科を修了した人は何人もいない。私が知っているのは、この森竹ぐらいです。大変な難関だった。今、そういってもピンとこないと思いますが、車掌科に入って「よし、俺は車掌になろう」と思ったんですね。結婚してからこの間に猛勉強をしたのでしょ。

これは、昭和初期の白老コタンの実景です。まだ昭和の初めは、森竹さんが国鉄の職員になって希望に燃えていたころは、彼はこういう道を通って駅に勤めたりしたのではないかと思います。今日では、こういう家は全くありません。皆さん立派な家に住んでおられます。

そして、これは彼が学んだ庁立の白老第二尋常小学校です。庁立というのは北海道立ですね、こちらで言うと県立で、和人が行った第一小学校は村立です。これは学校の一部ですけれども、ここで皇族やいろいろなお偉い方が来ると、こうやってアイヌの踊りをみんなにお見せするというをやったわけです。

森竹少年は小学生の頃、道で和人の子供らと行き交うとアイヌの子供たちに罵声を浴びせられ、そこで彼はいつも喧嘩になったそうです。第二小学校の校長先生が多分血だらけになって学校に入ってきた森竹に「お前は和人の子とそんなに喧嘩して、腕力で勝とうとしても何の意味もない

ぞ。腕力ではなく学力で、知力で勝て」というふうに諭したそうです。このアイヌの第二小学校と和人の第一小学校は、運動会や学芸会では一緒だったようです。学芸会のとき、小学生の森竹少年は教科書に載っている白い雀、白雀と言うんですが、その物語を全部暗記して行って、みんなの前で堂々と暗唱したところ、第二小学校にも優秀なアイヌの子がいるぞということで、それから道路で行き交っても森竹少年らをいじめなくなったということです。

【スライド12】解平運動

そして、1922（大正11）年に水平社、部落解放の全国的な組織が結成されたのですが、そのときに、旭川アイヌの人たちが、我々も水平社と同じように身分の拘束から解放されたいと、解平運動を起こします。「聖代の今日、なお部落民として社会より特殊視せられ、差別的待遇を受けつついる我アイヌ人に依りて解平運動なるもの起こされ一刻も早く解放され至公至平の社会的地位を獲得せんとの叫び声を聞くは、我が日本のアイヌ民族のために快哉を叫ぶものである。旧土人保護法、土人学校の完備等は我々に対し余り有難からぬものです」彼は堂々と当時の新聞にこういうことを書いたのです。彼は、何とか一日も早く平等な社会となってほしいと叫んだわけです。

【スライド13】連合艦隊の室蘭入港

1934（昭和9）年、室蘭港に連合艦隊が入港することになり、2万6千人の海軍の兵隊が来ることになりました。戦艦など多くの軍艦も来るので室蘭市は、見せ物としてアイヌの熊まつりの踊り、これをこの水兵たちに見せようではないかということになりました。

森竹さんはこのとき、「来る29日室蘭に入港する連合艦隊歓迎に際し、白老アイヌを招き、熊祭とアイヌ舞踏を将兵に観覧させるとの事であるが、私は、全道同胞1万5千余のアイヌ民族の名においてこれが中止方を希望するものである」（『小樽新聞』1934年8月24日）と新聞に投稿した。このとき、小樽新聞は彼の立場を考え、匿名で出したんです。しかし、小樽新聞はこの数日後に、これは白老アイヌの森竹竹市という国鉄マンが投稿したものであるということを報道しました。彼が身を明かすことをオーケーしたんでしょね。

しかし、彼の声は届かず、アイヌの人たちが白老から出されて、たくさん水兵さんたちに見てもらうことになりました。結果的に主張は通らなかったが、民族の復権にかけ強い意志の表示であったと思います。

【スライド14】厚生会結成

国鉄職員として雇員となり、教習所車掌課を修了して夢が膨らんだが車掌にはなれなかった。その理由をはっきりしないが、彼はやがて挫折と葛藤の中からアイヌ民族としての自覚と伝承者で生きようという決意をしたと思われる。そこで1934年全道の友人や知人らアイヌの青年に「全道ウタリに諮る」という檄文を送るが、ウタリ（同胞）の反応はなかった。静内駅（日高管内）に勤務した1935（昭和10）

年にアイヌ青年による厚生会を結成します。これはアイヌ青年の自立厚生のための会ですが、道庁の役人、当時の静内町長、警察署長、それから小学校の校長さんたちもこれに列席してこの会に賛辞を述べています。この会歌を読むと、戦時色のにじむ体制に協力していこうというアイヌ青年の集まりのようであり、立派な日本人になろうという決意表明のようです。

【スライド 15】『原始林』発行

森竹は 1935(昭和 10)年突然国鉄を依願退職、離婚そして故郷の白老村に帰り再婚して漁業に従事しました。そして 1937(昭和 12)年この『原始林』という詩集を自費出版しました。今、北大の図書館に原稿がそのまま残っております。これが彼の字です。非常にどの字もきれいな字なんです。青ペンできれいに書いています。

レジメの三枚目を見て下さい。この詩集の序文に「この過渡期に生れ合わせた自分が、同族の同化向上に喜びの心躍るを禁じ得ない反面、何か言い知れない寂寥の感に打たれるのをどうすることも出来ないであります」といい、アイヌ民族として差別のなかに生きながら民族として生きようとする複雑な気持ちを述べています。

彼は、こうも言いました。同じレジメに「アイヌの血」という詩がありますが、その中の一節に「雑婚 混血 同化 これをしも滅亡と云ふなら私は民族の滅亡の一日も早からん事を希ふ 虐げらるる悲憤 耐え難き世人の嘲笑 私は可愛い子孫にまで此の憂愁を興へたくない しかしアイヌの風貌が現世から没しても其の血は！永遠に流れるのだ 日本人の体内に。彼は、心の中で葛藤しながらアイヌ民族として伝承者として生きようとした苦闘の詩だと思えます。

【スライド 16】真正日本人はアイヌ民族

戦後 1946(昭和 21)年に静内というところで、北海道アイヌ協会が設立されます。この時、戦前戦中の厳しい時代アイヌ民族の自立と民族差別などに毅然と抗してきた森竹さんは常任監事になり、その機関誌『北の光』の中で「天孫降臨即ち天孫民族と自称する和人共が日本に上陸前から日本を占有して居た真正日本人は、我々アイヌ民族である。私共アイヌ民族は、自分たちこそ真正日本人であるという自覚の下にアイヌ民族の誇りを持って平和日本建設の為にスタートを切ろう。我々こそ日本の真正日本人なんだ。天孫降臨、すなわち天皇陛下を頂点とする和人たちがアイヌ民族を劣視してきた。しかし、和人たちが住む前に我々が住んでいたんだと先住民族であることを高らかに主張しました。

【スライド 17】昭和南山アイヌ記念館長

1961(昭和 36)年、北海道アイヌ協会は北海道ウタリ協会に改称し、森竹さんは顧問となった。この年洞爺湖近くの昭和南山という観光地のアイヌ記念館の館長に迎えられました。旭川から来ていたアイヌ文化伝承者の杉村京子さんらに民族文化のすばらしさとその伝承の大切さを切々と

説き、若い伝承者を育てました。

【スライド 18】町立白老民俗資料館長

65歳の1967(昭和 42)年、白老にできた町立民俗資料館に館長として迎えられて3年間勤めます。そして、今もこの建物はございます。現在、財団法人白老アイヌ民族博物館となっております。白老に行かれた方おられますか、もしおられたら手を挙げていただけますか。白老にアイヌ民族博物館というのがありますので、ぜひ行ってください。

そして、これは彼が浜に立っている写真ですね。彼の生まれ育った浜、国鉄退職後白老に帰り漁師もやりますが、余りぱっとしなかったのですね。当時を知っている漁師の古老は、森竹さん頭は良かったけれども、漁師やらせたらおれらにかなわなかったなといいますが、これはいたし方ないことですね。しかし、一生懸命生きた。牛も飼い、そして漁師もやり、ピリカという食堂をやり、その後に民芸店を出したりします。食堂や民芸品店は奥さんがやったんですが、このお店は今もえぞ屋という名前で子孫の方がポロトのアイヌ民族博物館前の民芸会館の中でやっています。もし、白老に行かれる方がいたら、えぞ屋というのが森竹さんの奥さんがやっておられた店です。

【スライド 19】墓碑銘

これは、森竹さんのお墓です。1976(昭和 51)年に亡くなられました。南無妙法蓮華經と書いてあります。白老のアイヌの方々、町内に日蓮宗のお寺がある関係か、日蓮宗の方が多い。その墓碑銘には「何時迄も 眠らずウタリよ起ち上がり 未来に生きる道を拓こう！森竹筑堂」と刻まれています。

それでは、皆さんにお渡ししてありますレジュメの2枚目をご覧ください。

立派な和人へ

彼は、世間では土人学校と呼ばれていた白老第二尋常小学校に通い、圧倒的多数が占める和人の白老第一小学校の生徒からさげすまされたりして、差別と蔑視の中で生きてきたわけです。しかし、ここに書いてあるように、負けん気から和人の子以上に国語をそらんじて賞讃された。立派な日本人になることが、差別と偏見を跳ね返し、ニシン漁場へ出稼ぎするような貧困から脱出する道であった。少年から青年へ、懸命な努力で郵便局、国鉄職員への道を実現させました。

表現者としての出発

15歳の時、白老郵便局長満岡伸一、この方の奥さんが照子といいまして女流歌人でした。白老のアイヌコタンの見学に中央から与謝野鉄幹・晶子、斎藤茂吉、前田夕暮らが訪れています。竹市は照子の影響を受け、北海道で活躍した歌人、並木凡平主宰の「青空」同人となり自己表現する力を養った。国鉄時代にはみずから同人誌「銀鈴」を発行、

俳句、短歌、詩とあらゆる分野を手がけ、民族の証を誇り高く、ほとばしるように表現しました。

挫折と葛藤

白老の駅夫として、苦学して国鉄の採用試験に合格した森竹さんは、1924（大正13）年、日高門別のアイヌ女性平賀若子と結婚した。追分、富川、苫小牧、静内の駅で貨物掛として勤務。この間、国鉄教習所車掌科を修了したが、なぜか車掌になれなかった。一方で、アイヌに対する差別を跳ね返し労働組合委員に当選。1934年、アイヌの団結を呼びかける檄文を全道の同志に送ったが、反応はなかった。翌1935（昭和10）年10月、突如国鉄を依願退職、離婚もして故郷の白老村に戻った。翌年、千歳のアイヌ女性水本佐美さんと再婚しました。

これは、私の推測ですけれども、彼は全力で社会にぶつかったんですね。例えば、連合艦隊が来るというときに、歓迎のアイヌの踊りを廃止せよと叫んだ。それから、静内に転勤になって、1935年にアイヌの代表を町会議員に当選させているのです。全力をあげたので、恐らく風当たりも強かった。それから差別に悩んだのではないかと思います。それはどなたも言います。やっぱりどうしても車掌になれない。教習所車掌科を修了したら、和人であればほとんどの人が車掌になったと思うのですが、彼はなれなかった。

もう一つは、その苦悩の中から、アイヌ青年大会が1931（昭和6）年に札幌の寺で開かれた。それに森竹が出たが、そのときパッチェラーというイギリスの宣教師の学園で働いていた水本佐美さんというアイヌの女子青年に出会い、これが恐らく離婚から再婚という道につながったのではないかと思います。当時離婚ということは反社会的な行動といわれていた時代であり、彼が国鉄をやめざるを得なかった理由の一つではないかと思います。

伝承への目覚め

森竹が生まれ育ったころ、白老コタンには優れたアイヌ伝承者が多くいた。急速な和人化、学校でのアイヌ語の禁止、厳しい差別と偏見の中、伝統的な生活と文化がおのずから否定された。立派な和人を目指した森竹もそうだった。

森竹さんは、死ぬまで国旗を掲げていた。彼は、自分の立派な家があったんですけど、そのほかにその母屋の隣りに「憩いの家」を建てました。つい近年までありました。そこに、友達やあるいは全道から訪ねてくる人たちと酒を飲みながらいろいろな話をされる場所をつくったんです。そこに日の丸を掲げた、国旗を掲げたんですね。行事のときには必ず掲げていた。俺はだれよりも日本人なんだと森竹は立派な和人を目指したのだけれども、しかし、アイヌを捨てられず、むしろ母語のアイヌ語やアイヌ文化の世界へ回帰した。「若きウタリの詩集 原始林」を出したあと、1955（昭和30）年「今昔のアイヌ物語」を出版しました。これは森竹青年にアイヌ文化を残すよう激励し続けた京都大学の東北大学教授であった喜田博士に答えたものだった。この他ノートにウェベケレや民話を筆録、晩年は現在のアイヌ民族博物館の前身、白老民俗資料館の館長として

アイヌ文化の伝承・普及に尽力しました。

私たち森竹竹市研究会が3年前に白老で生誕百年祭を行ったときに、各地から150人くらい白老に集まっていただいてやりました。その時に、先ほど見た昭和新山のチセをつくられたお土産屋さんが来られて話をしました。森竹さんというのはとにかく威厳のあった人だった。例えば、「酋長」と森竹さんにいうと烈火のごとく怒ったそうです。「こらー、今、何と言った。酋長とは何事だ、今は酋長なんて言わないんだぞ」と、怒鳴りつけたそうです。これは、そこの経営者、オーナーとしてはびっくりすることなのです。でも、そのあとは、穏やかに優しくアイヌ民族の文化を話したので、怒って帰るような人はいなかったそうです。

誇り高く

高らかに民族復権を叫んだ熱血漢も、晩年は人間的に円熟。「憩いの家」と名づけた書齋で悠々自適の日々を送る。「誇り高くアイヌ文化を守れかし 酒の肴にされることなく」、「牛飼って雑事に追われるこの俺に 昔の友聞く『本』書いているかと」と詠んだ。室蘭の歌友井上文子という方は、室蘭では非常に大きな材木屋の奥さんでした。その奥さんが、若き森竹を見ていたんです。晩年文子さんと森竹さんと短歌を通しての交際があり、森竹さんは「これをしても恋と云うなら燃える恋 萎えしわが身をもえつくすまで」と熱く詠んだ。これはあくまでも文通と歌の世界のことだった。

次に、旭川の伝承者、杉村京子は、「エカシの中のエカシ」と讃えている。森竹竹市生誕百年祭に彼女はやって来ました。最初に北海道ウタリ協会の元理事長長野村義一さんが偉大な先輩の思い出というのを語って、次に昭和新山アイヌ記念館長時代を杉村京子さんに話してもらったんです。しかし、感きわまってしゃべれないんですね。そして、彼女は最後、両手を挙げ天を仰ぎ、「森竹さんは『ラメトク』度胸の、勇気のある、『シレットコロ』美貌な、ハンサムなことですね、『パウエトッコロ』雄弁な、『テケトク』手にものでつくりことができるアイヌだった。そして森竹さんほどのアイヌはいないはずですよ。いなかったはずですよ。また、いない。これは、年数がたてばたつほどわかります」彼女はこういって絶句した。

レジュメの3枚目を見て下さい。実は、先ほどの「原始林」の序の全文をあげました。「原始林」というのは、表紙はこうなっております。これは、昭和12年につくりましたので、これはちょうど今から67年前の出版です。

「アイヌ亡びず」は、没後出版された「レラコラチ」という本に載っている詩です。アイヌとして生まれ、幼少のころシャモの子等にアイヌアイヌと嘲笑されて泣かされ、長じて社会の差別侮蔑に憤激する。伝統のくらしの業を捨て、シャモの真っ只中へ飛び込む。鉄道員になり、勤務に励み学びいそむ。燃ゆるが如き情熱は詩歌となり熱弁となって社会に若いウタリーに呼び続ける。われらこそ先住の民、胸張って誇と共に強く生きようと叫び続けたのが森竹竹市さんの一生だったと思います。

次にアイヌ史年表と、森竹筑堂の年表を載せてあります。

1997（平成9）年、アイヌ新法とよばれるアイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律が施行されたわけです。ここに旧土人保護法は廃止されました。まさに、森竹竹市さんの一生というのは、明治、大正、昭和、しかも旧土人保護法の中に生き続けた。民族の自立と復権、伝承に一生を捧げた森竹竹市さんは偉大な方だったと思います。

最後になりましたが、私は公立高校の社会科の教師でしたので、多少授業の中でアイヌ民族に関する教育を実践してきました。みなさんの中に学校にお勤めの方もおられると思いますので、教育現場で何かありましたらお知らせ下さい。調べてお答えいたします。住所氏名は、2頁に載せてあります。

長い間お聞きいただきありがとうございました。（拍手）

参考文献

- 『北海道の百年』山川出版社
- 『アイヌの歴史』三省堂
- 『アイヌ民族の歴史と文化』山川出版社